

プルシアンブルー



札幌市医師会
明園内科小児科医院

秦泉寺 亮

日曜午後の、とある病棟勤務室。温度板に、入院患者の体温と脈拍を記載しているA看護師の細くて綺麗な指には、トンボ社製の赤青二色鉛筆が握られている。

そして傍らのラジオからは、玉置浩二率いる安全地帯の曲“プルシアンブルーの肖像”が微かに流れていた。

そこに入室してきたのは、長身スリムなB医師、そしてA看護師との会話が始まる。

B医師 「この曲は安全地帯の新曲“プルシアンブルーの肖像”でしょ？」

A看護師 「そうですよ、私の好きな歌です」

B医師 「いい曲だよ。でも安全地帯の曲なら、私は“恋の予感”の方が好きかな？」

A看護師 「確かに“恋の予感”もいいですね」

B医師 「ところでAさん、プルシアンブルーってどんな色なのか知っているよね？」

A看護師 「うーん？ 青系の色でしょうけど、詳しくは知りません。どんな色ですか？」

B医師 「本当に知らない？ Aさんの、今一番身近にある色だけだね」

A看護師 「えっ？」

B医師 「分からないかな？ それじゃあ温度板だけど、赤色で脈拍を、青色で体温を、折れ線グラフにして記載しているよね。その赤青二色鉛筆で」

A看護師 「そうですよ、それが何か？」

B医師 「Aさんが今握っている二色鉛筆の赤い部分を見て！ 英字が書いてあるはずだけど、どう？」

A看護師 「はい、書いてありますよ。ヴァーミリオン？」

B医師 「そう、朱色ってことだよ。で、青い部分には何て書いてある？」

A看護師 「あっ！」

にっこり微笑んで病棟勤務室を立ち去るスリムで美人のB医師、彼女の白衣の内には、紺青色（プルシアンブルー）のスカートが見え隠れしていた。

一人残ったA看護師、男にしては美しいその指先で触れているのは、赤青二色鉛筆の青色部分。そこにはPRUSSIAN BLUEと記されていた。

一年後、まるで恋の予感に導かれたかのように、

この男性看護師と女性医師は結婚式を挙げた。プルシアンブルーに輝く湖の畔の教会で！

あれから四半世紀以上経っているが、毎年の年賀状から、今でも仲睦まじい二人の様子が見て取れる。この原稿が北海道医報新年号に掲載される頃には、既に届いているであろう彼らからの新年の便りを、今から心待ちにしている。

あなたは海派、 それとも山派



函館市医師会
西堀病院

小 芝 章 剛

和歌山県の実の町で生まれ、従弟を現役の漁師に持つ私は海が大好きである。

とにかく船に乗りたくて、1級船舶の免許を取ったのが7年前。ヨットの体験乗船の新聞広告を見た妻が「行ってみたら」と言ったのが5年前の夏。当日は風が強く小雨交じりで、函館湾内をほんの1時間弱だったでしょうか。ヨットに乗るのはその時が初めてでした。

その後、クラブハウスで開かれた懇親会で隣に座ったベテラン船長の新井（仮称）さんが、

「中古だけどヨット買いませんか？」

『え！ ヨット？ そんな高い買い物、いきなり言われても』

「いくらぐらいするもんなんですか」と尋ねると新井さん、片手をサッと広げる仕草。

『……？』

ヨットは車より高価であると誰しもが思うことであって、その時は私もその一人であったわけで、その5本の指の1本は一体いくらを意味するものなのか。安く言って初対面で嘲笑をかうのもシャクだし、あまり高く言ってその値で売りつけられても困るし。ハッキリ言って全く見当が付かない。中古だがまだまだしっかり走れる。ビギナーにはうってつけの物件。大きさは25フィート、6人乗り。

『え！ そんなに大きいヨット。じゃー、指1本100万？』

「先生にはそう高くない買い物だと思いますよ」

「そんなことないですよ」と、顔の前で空いている方の手を何となく横に振る。

『ん？ 何だか昼間のビールが効いてきて少々気持ち大きくなっている。まずい！ このままだと買わされそう、いや、買っちゃいそう』

クラブハウスでは、海の男たちが誰とはなしに気